

伊藤律スパイ説修正

内部文書発掘で判明



伊藤律氏(右)が1980年9月4日、成田空港で帰国した際、車いすに押し込まれ、25年ぶりに浮上した。次男の淳さん(左)も写っている。

昭和史に残る国際スパイ事件のソルゲ事件。その摘発の端緒は、共産党元幹部伊藤律の密告だった。伊藤の生誕百年に当たる今年、通説とされてきたこの「伊藤スパイ説」が事実上、覆された。

伊藤を「革命を売る男」と指摘した松本清張の『日本の黒い霧』に発行元の文芸春秋が異例の断り書きを入れることになったからだ。この通説はどう突き崩されたか。(森本智之)

捜査関係者ら→ねつ造断言 ネタもと→G・H・Qスパイ

止め、伊藤が供述する前から特高がソルゲスパイ団のメンバーの監視を始めていたことを明らかにした。
また、捜査指揮に当たった検察幹部らの座談会発言録も探し当てた。この中で、戦

「よやくやく」まで来たかという思い。「労働者生活四十五年」の自分にはよくやったかな。渡部富哉さん(ハシ)は話す。元共産党員。戦後しばらくして党から離れたが、旋盤工として働き、労働運動に携わってきた。一九八五年二月、共通の知人の葬式で、偶然、伊藤と知り合い親交を深めることになった。中国での二十七年の投獄

で、目も耳も不自由な伊藤は、筆談で「スパイをしていない」と言う。しかし、頼るべき伊藤の家族は共産党に籍があり、沈黙を守らざるを得ない。渡部さんは一人、突き動かされるように調査を始めた。

後、検事総長となる井本台吉は「伊藤律なんかほとんど関係ないよ。あれを伊藤が全部ばらしたようにしちゃったんだね」と述べている。
こうした調査結果を九三年、「偽りの烙印」にまとめた。だがこれにとどまらず「事件の奥深さに引き込まれるように」さらさらのめり込んだ。ソルゲの本国である旧ソ連など海外の研究者らとも交流を始

め、国際シンポジウムを二年おきに開催するなどして資料の発掘を進めたのだ。

そこで新たに分かったのが、捜査を指揮した特高の係長がまた事件の進行していた当時、内部研修会で発表した内容だ。係長は「事件の検挙全体が伊藤の口一つから出たかという絶対にはそうではない」と断言。さらに「伊藤はこちらの内偵線(スパイ)によって分かっていく問題については一言も言わない」などと述べ、別の特高側スパイにより、事件の情報を得ていたことを暴露していた。この係



会見する渡部富哉さんと伊藤律の次男の淳さん(東京都内で)

長は戦後、伊藤スパイ説を証言した張本人だった。そもそもスパイ説のきつかけは、米国が四九年、発表した「ソルゲ事件の真相」という報告書。共産党も伊藤を除名処分とし、その後、ソルゲ事件で死刑となった日本人協力者尾崎秀実の異母弟で評論家の秀樹が「生きているユダ」を執筆。清張もこれに続き、通説として広まった。
一橋大の加藤哲郎名誉教授(左)が発掘した米公文書は秀樹の「ネタもと」が、金で雇われたG・H・Q(連合国軍総司令部)のスパイだったことを明らかにした。この人物は秀実の元同志でソルゲ事件の生き残りとして、秀樹に情報提供したが、加藤氏は「G・H・Qから月二万円で雇われ、伊藤律を『革命を売る男』に仕立て上げた」と指摘する。

一連の調査について、映画「スパイ・ソルゲ」を監督した篠田正浩さん(ハシ)は「驚くべき内容で、九割方書き上げていた脚本を一から書き直したほど」と振り返る。研究者の間では、既にスパイ説は大きく揺らいでいたが、今回、文芸春秋に訂正を申し立てたのは遺族が共産党員から退いたことによる。律は「いずれ真相が明らかになる」と言い残して亡くなった。次男の淳さん(ハシ)は「一番の理解者の母も十年前に八十三歳で亡くなった。これから父の生涯を本にまとめた」と話した。
渡部さんは「律は、中国で投獄されたのは『野坂参三の謀略』と話していた。今度は野坂の闇を解明したい」と話した。